

第1回 春の章

「巨匠たちとエコロジー——ロシア文学の自然誌——」

小林 実

はじめに

ロシアというと寒い、暗いというイメージがあると思いますが、短いものの、しっかりと暑い夏がありますし、春や秋の美しさは様々な文学作品に描かれています。またシベリアのイメージもありますが、ロシア文学の代表作の多くは、モスクワ近郊などの西ロシアが舞台となっています。それに温暖な黒海沿岸や、山岳地帯であるカフカースもよく描かれます。そのように見ていくと、ロシア文学は極寒のツンドラ地帯ばかり描いているわけではないことがわかります。今回は、ロシア文学の歴史に触れながら、様々な風土にもとづく作品の数々をご紹介します。

ロシア文学の父プーシキン

ロシアは、ギリシア正教を受け継いだ文化圏にあり、西ヨーロッパとは違う文化的発展をしてきました。しかし、17世紀末に登場する皇帝ピョートル1世（大帝）が、ロシアの「ヨーロッパ化」を推し進め、フランスやオランダの文化を積極的に取り入れながら大改革を行います。いわばロシア版明治維新といったところでしょうか。

そして西ヨーロッパで発展していた文学も入ってきますが、これを翻訳する言葉がありませんでした。当時知識階級が使っていた文章語は、フランス語か教会スラヴ語という古語でした。それが、ナポレオン戦争によってナショナリズムに目覚めた19世紀初頭に、誰もが使える美しいロシア語の文章語が求められるようになり、詩人アレクサンドル・プーシキンがそれを実現します。彼によって本格的に、近代ロシア語によるロシア文学が確立されたのです。トルストイもドストエフスキーも、プーシキンが開拓した道を、それぞれの才能にしたがって拡大していったに過ぎません。

ロシア文学の歴史においてプーシキンが切り拓いた事柄はいろいろありますが、風景描写もその一つです。それまでは西ヨーロッパや古代ギリシア・ローマの古典に範をとった風景しか描写の対象になりませんでした。彼が蟄居先のミハイロフスコエ村を詩にしたことから、ロシア人は自分たちの身の回りの風景を文学の題材にすることができるようになりました。

自然を描いた手記^{ザビースキ}

ロシアの貴族たちは郊外の田園地帯に広大な領地をもっています。そこで農業経営を指揮したり、狩猟や釣りといった娯楽に興じたりします。そうした生活を「手記」というスタイルで描いたのが、アクサーコフの『釣魚雑筆』1847とツルゲーネフの『^{ザビースキ} 獵人日記』1847-52です。前者は釣りに関する蘊蓄を百科全書風にまとめたもの、後者は狩猟家が見聞した農民生活を描い



た短編小説集です。「あいびき」と題する一篇を二葉亭四迷が訳して、日本近代文学の文体と自然描写の礎となったことが知られています。

ヨーロッパでは自然は人間が克服すべきものとして扱われますが、ロシアでは自然は厳しすぎるせいか、うまく共存していくものとして文化に取り入れられます。ロシア文学が田園を舞台とし、どこか田舎臭いのは、そうした環境要因によるのかもしれませんが。

南と北の自然

以上はいずれもモスクワより数百キロ南の中西部が舞台ですが、更にほかの地域を舞台としたものもみていきましょう。

プーシキンが37歳の若さで亡くなったあと、彼の意志を継いだのがレールモントフです。彼は政府に逆らった廉で、山岳地帯のカフカースに流され、そこを舞台に詩や小説を書きます。『現代の英雄』1840という作品はロシア初の心理小説とされています。

また別の後継者がゴーゴリです。彼はウクライナ東部の出身で、ウクライナ民話とコサックの世界を小説作品に仕立てあげました。『ディカーニカ近郷夜話』1831、32 『タラス・ブーリバ』1835などに、広大で温暖なウクライナのステップが描かれています。

そのウクライナ南部に付属するクリミア半島も独特の風土があります。プーシキンが叙事詩「バフチサライの泉」1824を書き、クリミア戦争に従軍したトルストイが『セヴァストーポリ物語』1855を書いています。なによりヤルタに住んでいたチェーホフが書いた小説「小犬を連れた奥さん」1899が有名です。ヤルタは実際に訪れてみると、庶民的な保養地で、チェーホフは決してお洒落なアバンチュールを描こうとしたのではないことが実感されます。

最後に、あまり知られてはいませんが、プリーシヴィンという作家を紹介して終わらしましょう。彼は20世紀前半に活躍しましたが、社会主義リアリズムに背を向けて自然観察的な手記ばかり書いていたという変わり者です。都会生活を捨てて、セーヴェル（北方地方）とよばれる地域の自然や民俗を記録し続けた、柳田國男にも似た学者にして文学者です。幸いに日本では詩人の太田正一氏がプリーシヴィン作品を多数翻訳してくれています。なかでも私のお薦めは処女作『森と水と日の照る夜』1907です。記録でありながら物語の感興にあふれた逸品です。

このように南北の異なる風土に根差したロシア文学の数々を、お楽しみいただけたらと存じます。ご清聴ありがとうございました。

新座市内大学公開講座 第1回
文芸世界への招待状～四季物語～
春の章

巨匠たちとエコロジー

-ロシア文学の自然誌-

講師：小林 実

1

ロシア詩の故郷ミハイロフスコエ (ブスコフ州)



<http://pushkin.uibk.no/reserve/ruet.asp>

2

ツルゲーネフの生家 (オリョール州)



3

Wikipedia


ヤースナヤ・ポリャーナ (トゥーラ州)



4

Wikipedia

プーシキンが基礎をつくる



アレクサンドル・プーシキン
(1799-1837)

プーシキンの偉業

- ◆ロシアの近代文章語を確立した。
- ◆ロシアの近代抒情詩を確立した。
- ◆ロシアの短編小説(ラスカース)および中編小説(ポーヴェスチ)ジャンルを完成した。
- ◆後進に大きな影響を与えた。

ということを超えて、
ロシア人にとって特別な存在

5

ロシア近代詩の誕生

「ツアルスコエ・セローの思い出」1814 ⇒ 古典主義的頌詩
「海へ」1824 ⇒ バイロンを模倣したロマン主義的抒情詩

↓

「冬の道」1826 ⇒ ロシアの冬
「(野を吹く風はいまだつめたくなる...)」1828 ⇒ ロシアの早春

6

1847年 文学上の一事件




ツルゲーネフ作
「ホーリとカリーヌイチ」が
雑誌『同時代人』に掲載
のち選作短編集『鴉人日記』に収録



セルゲイ・アクサーコフ
『釣魚雑筆』刊行
56歳の処女作

田園生活の ルポルタージュ

舞台としての田園




イワン・ツルゲーネフ
(1818-83)

『鴉人日記』	『その前夜』
『ルーチン』	『父と子』
『アーシャ』	『春の流れ』
『貴族の集』	『煙』
『はつ恋』	『処女地』

など

郊外や保養地の田園を背景とする貴族
社会（共同体）の物語

レールモントフとレフ・トルストイ コーカサス戦争（1817-64）



プーシキン「カフカースの捕虜」1822

↓

レールモントフ
「カフカースの捕虜」1828
「ムツィリ」1839
『現代の英雄』1840

レフ・トルストイ
『コサック』1863

『現代の英雄』挿絵

コサックの大地



ゴーゴリ
『ディカークニカ近郷夜話』1831,32



ゴーリキー
『チェルカッシ』1895
(『ゴーリキー短編集』)



ショーロホフ
『静かなドン』1928-40



ゴーゴリ
『タラース・ブーリバ』1835

クリミア半島の3つの顔



プーシキン
『バブチサライの歌』1824

レフ・トルストイ
『セヴァストポリ』物語』1855

チェーホフ
『小犬を連れて来たさん』1899

プリーシヴィン



ミハイル・プリーシヴィン
(1873-1954)



『森と水と日の照る夜
セーベルの思い出』
太田正一訳
成文社



『忘れられたロシア
その聖なる異郷の心とこころ』
太田正一訳
平凡社

生きとし生けるもの、宇宙と呼吸をひとつにし、季節を嗅ぎ分け、自然に生きる
人びとを愛してよまず、森や湖や川や山野を家族とともに、またたったひとり
でとことん減少したのであった。

——太田正一「詩人の誕生」(『忘れられたロシア』より)